

ラース・スヴェンセン著『働くことの哲学』紀伊國屋書店（2016年）… [A]

中谷文美・宇田川妙子編

『仕事の人類学—労働中心主義の向こうへ』世界思想社（2016年）… [B]

小川さやか著

『「その日暮らし」の人類学 もう一つの資本主義経済』光文社新書（2016年）… [C]

労組の組合員対象のアンケート調査に「仕事のやりがいの有無」といった質問がよくある。仕事にやりがいを感じる組合員が多いという結果が出れば、経営側のみならず、労組にとっても望ましいと受け止められる。仕事のやりがい感は個人的な感情や状態であるだけでなく、職場や企業への一種の総合評価としてとらえられ、組合員の立場から生活の質の向上を目指す労組にとっては、みずからの活動の“成果”を測る指標のひとつと考えられているからである。

現在、多くの人にとって仕事のやりがいは重要な関心事だが、いつの時代もそうだったわけではない。ノルウェーの哲学者スヴェンセンは [A] の中で、自らの仕事に対する感覚を、20世紀後半の半世紀を造船所で勤務した自身の父と対比させ、現在は「仕事とはまずもって自己実現の手段であるべき」とするイデオロギーが一般化しているとみる。

少し前まで、大半の人にとって仕事（労働）とは苦勞多く辛い営みであった。労働条件についても、1世紀前には残業手当も有給休暇も健康保険もなく、労働者は今の基準からすると驚くほどの長時間労働を強いられていた。歴史的にみると、奴隷制の上に成り立つ古代ギリシャを典型として、古代から中世にかけては労働は軽んじられ、ネガティブな位置が与えられていた。宗教改革を経て、労働（職業）は「天職」という意味合いを獲得するようになる（M. ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）。宗教が背景に退くと「自己実現」がそれにとって代わり、個人主義の進展は、神に対する奉仕を自分自身への奉仕へと塗り替えていく。

仕事は私たちの生活・人生に欠くことのできない存在で、仕事のない生活は（時に魅力的に映るが）耐えがたいものであろう。それは、何よりも仕事が生に意味をもたらしてくれるからだと言者者は言う。知識社会化が進む現代は、より多くの労働者が「知識労働者」（P. ドラッカー『変貌する産業社会』）と化し、仕事に創造性や個性を発揮するようになってきている。ますます多くの人が仕事に自己実現を求めるようになり、有意義でやりがいを感じられる仕事に就いている人は、それによって自己実現が達成でき、幸福な生活を送ることだろう。他方で、あまりにも仕事に偏った生活は、仕事と同様に意義をもたらしてくれる他の要素を人生（生活）から追い出すことになる。

本書は、最初に西洋文化における仕事（労働）の位置づけの変化を歴史的にたどることで、仕事にまつわる観念や働き方を、時間軸上で相対化してみせる。その上で、近現代社会で進行してきた変化を踏まえて、仕事のありようの変化と私たちの感じ方の変化を様々な側面から照らし出す。

これに対し、[B] は仕事に対して人類学的アプローチをとる。文化（社会）による差異をフィ

ールドワークを通じて明らかにする人類学は、歴史的思考と並んで、私たちの常識や思い込みを相対化し、より広い視野に立つのを助けてくれるリソースである。本書は論文集であり、焦点をあてるフィールドは様々であるが、ジェンダーの視点を共通項とする点が大きな特徴となっている。

「性別分業の揺らぎに向き合う」と題された第Ⅰ部では、ともに社会主義からの体制転換を経験したウズベキスタンとブルガリアの事例、日本人女性とパキスタン人男性のカップルという国境を越えた家族の形成と再編、また、農村―都市間の労働移動を扱ったタイの事例が紹介される。いずれの事例でも性別役割分業を核としたジェンダー規範が依然大きな影響力を持っている一方、実際の状況の中で様々な交渉や調整が重ねられ、規範からの逸脱の再解釈や受容も含む多種多様な現実がある。そこでは、ジェンダーのみならず、家族、国家、民族、宗教といった様々な要素の絡み合いの中で、日々の営みの一部として不断の交渉・調整が繰り返されることが生き生きと描き出されている。

第Ⅱ部「〈労働〉概念の外延を広げる」は、主として男性の働き方に注目しつつ、多様な仕事のあり方に光を当てている。仕事はたんに収入を得るための経済活動にとどまらず、さまざまな社会的価値の実現としてもとらえられる。たとえば、儀礼が仕事と同じ言葉で表現され、都市移住後も儀礼参加のために頻繁に出身村に帰省するインドネシア・バリ島の人の場合は、収入額よりもむしろ勤務時間の裁量度の大きい仕事に魅力を感じる。南部アフリカ・カラハリ砂漠の元狩猟採集民は、政府によって提供される定住地や雇用労働にしがみつくとなく、農耕、狩猟採集を含む多種多様な生産活動を展開しながら、昔ながらの「分かち合い」の慣行の中で生きている。

この第Ⅱ部に収録された論文を含む[C]は、“Living for Today”（その日その日を生きる）をキーワードに、東部アフリカ・タンザニアを主たるフィールドに定め、インフォーマル経済を動かす人びとの生活を追っている。彼らの生き方、働き方は、私たちとは相当に異なっているようにみえるが、その差異を一言で表すのが Living for Today であり、その生き方は彼らの「生計多様化戦略」にもみてとれる。生計多様化とは、個人単位では、ひとつのことで失敗しても、別の何かで食いつなげるように、さまざまなことに（時には同時に）手を出すようなやり方で、何でもある程度こなせる“ジェネラリスト”への志向をもつ。世帯単位では、誰かが失敗しても他の誰かの稼ぎで食いつなげるように、世帯メンバーがそれぞれ別の仕事に就いて、時には資本を融通しあうようなやり方である。

人類学的視角は、時として西洋文明（資本主義、自由民主主義、西洋的価値観、etc.）に対するオルタナティブを求めて“民族社会”の文化や価値観を持ち上げる。それは、自らを相対化する点で意義があるが、往々にして何らかの願望の「投影」という側面を伴っている。この場合でいうと、主流派経済、とりわけ新自由主義的な市場経済に対するアンチテーゼないしオルタナティブを、周縁に位置するインフォーマル経済に求めるような姿勢である。

しかし、Living for Today に立脚するインフォーマル経済は、主流の経済システムへのアンチテーゼというより、それを脅かす「もう一つの資本主義経済」として台頭してきていると著者はいう。現在、アフリカからは零細商人が中国に“殺到”し、大量の中国製品を買い付け、故国で販売

している。彼らは自由な市場取引を好み、規制をかいくぐり、時には詐欺的手法も厭わない。このもう一つの経済は新自由主義よりさらに徹底的に新自由主義的であるが、他方で、主流派経済システムの生み出す不公平や不公正を解決する回路ともなっている。その“主力商品”である廉価なコピー商品や模造品は、ブランド企業の知的財産権を脅かしているが、他方で、人びとの創造力や社会的ネットワークの力を解放し、発展途上国の貧しい人びとに物質的豊かさをもたらしているからである。その意味では、主流派経済を補完する機能を果たしているとも言える。

中国の山寨（偽物）文化と Living for Today の類似性・親和性の指摘は興味深い。ピラミッド型をとるブランド企業に対して、山寨企業（群）は水平的ネットワークで動く。零細企業同士がオープンソース・ソフトウェアの開発のように（あるいはウィキペディアのように）、柔軟に協力し合って、ブランド企業では不可能なスピードで次々に新製品を生み出していく。「絶えず試しにやってみて、稼げるようなら突き進み、稼げないようなら撤退する」という戦略をとる彼らは、独占や競争力維持・向上には関心がない。過剰な利益は求めないそのスタンスは、後続の者たちに気前よく商売のコツを伝授するタンザニアの零細商人たちと共通する。他方で、そうして開発された商品を、零細商人を経て手にするタンザニアの人びとにとって、コピー品や模造品は生活の必要を満たすとともに、「買い物衝動」を満たしてくれる商品である。それもまた、Living for Today の生き方のひとつである。

人間はみな Living for Today である、と著者は言う。不安定や不確実を避けたり、現在の延長線上に「未来」があると考えたりするのは、私たちにとって当たり前のことと感じられるが、それは限られた時代、特定の文化において主流である感覚に過ぎないのだと思わせられる。人類学のまなざしは、今ここにいる私たちが別のようでありうる可能性を語りかけてくる。

歴史的経緯と社会（文化）的文脈が織りなす編み目の中に在る私たちは、一方では与えられた条件の中で生きざるを得ないが、他方で、絶えず今を、明日を作り出す存在でもある。その日々の営為が次の世界を作っていくのなら、できるだけ多様な素材を手にしてほしい。歴史的知見、哲学的志向、他の文化にある人びとの生き方は、いずれも次なる働き方を考えるにあたってインスピレーションの源泉となってくれるに違いない。（湯浅 論）